

しほき人の手紙の書やり

ずんどしはき人友だちの所へ使をやるどて手紙をつかはしけるに紙一枚を惜みて折節秋の末つかたなれば庭に色よき柿の葉のあししを手紙にかき小者にもたせやりける、先の人この手紙を見て肝をつぶし、いかに心やすきとてあまりなる所行なり我も返事をかくべきが此やうなる葉のなし紙にかくも思へば面にくし何と哉としばらく思案してかの小者をそばへ近く呼び、返事すべきに汝肩をぬげどて使の脊中に墨くろくくと書ければ小者さうく歸りて主人にむかひ、返簡の趣いさい私がせなかの如しと口上に申さるも一笑。

金貨

(元祿版 もらひみくば)

喰ふものもくはでためたる口なしの黄金には利なくはす金貨  
 將基にもよべる金銀かしつけて 多く歩をさる 人の利強さ  
 窓 屋  
 栗 原

つれく草

四五人の連中あつまりて俳諧をしてたのしむ所へ丁稚小僧會釋しながら。旦那さまつれく草に月花はさのみめに見るものかほどムりますがあれは何の事でもります。ハテわれはこしやくな事を聞きおるな、まづ月は十五日が満月とて丸くみつるなれども十六日からはかける又花は咲きも残らず散りもはじめずといふ時が盛りなれど落花とて次第に散るなり人間もそのとほり年よれば衰へるほどに身に引うけて見よ月にめで花にたはむれ酒をのみ心をよるこばせるばかりではないといふ事ぢや。これは難有ござりますッシテ月と花とはどちらが樂みでござりますと聞に側に居りし番頭。それは月がたのしみさ。トハ何故でムります。ハテ提灯がいらぬ。(文政版 お備話)

鐵 槌

いたつて吝嗇なる人。コリヤ長吉となりへ行て御無心ながらちどの  
 間鐵槌をお貸しなされてといふてかりて來いといふに長吉となりへ  
 ゆき。御無心ながら鐵槌をお貸し下されといへば隣家の主人もした  
 たかものにて。シテ鐵つちを何にするのぢや。ハイ棚をつるのでム  
 りますと半分聞ず。めッさうな事をいへ鐵槌で釘うつてたまるもの  
 か貸せぬといはれ長吉立歸り其通りいへば主人。はてさてしはいや  
 つ乞食見たやうな人間ぢや、しかたがない宅の鐵槌を出してつかは  
 う。(未詳)

不 學 門

名津希親方

禪門になりたる者にむかひ名をば道見といふべし、人ありてよみを  
 問は道はみち見はみるとこたへよ。かしこまりて候有難しみると  
 いふものはそのまゝひじきに似たるもの、事で御座るほどになかな  
 か忘れは仕まひといひしに、その後ある人、そちが名は道のみちで  
 あらうず、けんはと問へば。けんはひじき。(萬治版 醒睡笑)

無 筆

無筆なるもの子供を手習に遣しけるが息子清書をして親父に見せる  
 親父見て。ア、よく出來たこの彩色まで大分見事だ。(安永版 稚獅子)

人の用

いたって文盲なる人、子を寺へのぼせ學文をさせけるに親には似ず殊の外器用にてあまたの書を読み故郷へかへりける程に近所の人々聞及びむづかしき文よめざる文字など問に來るに一としてくらき事なくよみあかしやりける、ある時親の申されけるは我れ數年金銀を入れ寺へのぼせけるも我身の用にも立べきかとおもひけるに他所へ讀みやり書きやりなばわれらが要用のときには殘る文字あるまじみなよその寶となるべし案じられけると。(元祿版 うかれ話)

書判

無筆なる隱居南京皿を買ひ孫の三吉をよび。これ己はよめぬからこの箱へかなでなんさんさらと書て置け。あいつ三吉筆をとり假名にてなんきんと書しが下がつまりしゆへ字で皿と書きければ。隱居これ書判には及ばぬ。(寛政版 書名未詳)

代筆

大屋さん御無心ながら手紙を一本書て下され。フム手紙を何方へやる。アイ八に錢を貸しやしたか遣しやせぬから手紙でみせつける氣さ。オ、夫なら彌お變りもなく珍重に存じ候しかれば。エなに叱ッたぐらゐぢやア遣す奴ぢやアごんせぬ。(文政版 咄の安賣)

無筆

ものもう。どうれ。北佐野三五右衛門御見舞申ます。今日は旦那まかり出ましてムります。しからは玄關帳へしるされお歸りの時分宜しう仰せ上られて下されませう。イヤわたくしは無筆でムります。そこもど様御自筆に帳面へ御名をおかきなされてくださりませ。イヤ拙者も無筆でムります。ハテ困ツたものだなア。しからはかういたしませう。如何なられます。参らぬ分になされてくだされ。

(明和版 鹿の子餅)

字引

無學の男二人寄合ひ玉箱を逆に持ち。鯉節といふ字は何扇で引くの  
だらうといへば一人の男。知れたことヲイサ。(今人 柳の屋作)

はかき

半日かゝりにて一枚のはがきをやうく書き女房に投函て来いとい  
ふ。女房表面を見。あなたまア神田のおばさん行で届くものですか  
ねといへば。亭主「なんの分らない事があるものか神田におれの伯母  
は一人しかない。(今人 市山亭作)

いんにんの四字だと無筆知ツた風  
正札をこれはいくらさばづかし

乞丐門

大晦日

大晦日の晩乞食夫婦づれにて橋の上に寐て居れば悪取の往來ひきも  
切らず女房の乞食夫にむかひて。あの通り懸金を夜徹し駈け廻り集  
めるも大抵の難義にてはなしわれくはその苦みもなく益も大晦日  
も宵から熟睡これと思へば乞食が遙に氣樂なりといへば夫が。その  
樂は誰がさせるみんな己がおかげだと思へ。(未詳)

賢女

汝が眼なきをこちてくごき節 うたひて人に乞へる鳥の目  
あき家の門も賢女はしら糸や 鈴木主水が 果もかたりて

榎 星  
千代 住

### 行倒れ

ある人行倒れ覺帳といふ帳面をひろひ。これはめづらしい物を拾たと一枚あけて讀で見れば

- 一 何月何日中橋の上へ倒れ候節ひや飯五はい古布子一枚。
- 一 何月何日兩國へ倒れ候節握り飯三ツ錢二百文。
- 一 青山へ倒れ候節 灸ばかり。(二九番 咄の蔵入)

### 雁が飛べは石龜

武士の眞似をする乞食あり破れ蓑を上下として犬を引馬とし又は竹の先をそぎて鎗をこしらへ毎日ふりまはして往來の邪魔にもなるほどなり。一日一人の武士通りかゝりしが彼の乞食の竹鎗武士の眉間にあたり疵つきければ武士大きに腹を立乞食をさんく胸打しける

にぞもはや息もたえくになる時仲間の乞食さまくんに詫言しければ武士もやうく聞入了簡して歸りぬ。扱うたれたる乞食は手足も痿て我小家へ歸る事も叶はず仲間の乞食をたのめば一同に口を揃へ。かやうな事もあらうかと毎度みなで異見をするのちや此後ふつ武士の眞似をやめるならそちが小家へつれて行てやらうさなくば此所にて命終る共みなく構ふものなしと言ふに打れたる乞食。かさねては武士の眞似を止むべし是に懲りぬものはなし何卒我小家へつれ歸りくれよとひたすら頼むに仲間の者も聞入れ庭の畚に載て二人して昇き揚れば苦しき息の下よりも。家來ども乗物やれ。

(安永版 斬大集)

梅が香や乞食の家も覗かると  
 乞食のほに彼岸の曇りか  
 乞食も雨をほしがる曇りか  
 御無用さいふ手の内は九段目の乞食芝居のなりもぼろんし  
 うしろから母は遠見の松右衛門 逆拂を語る 女門附け  
 其孤山角  
 三孤山角  
 作者不知  
 語志庵跡  
 語安齋有  
 恒

### 非人の僭上

身代をつかひ果せし放子一家一門にも見かざられ終に乞食となり下寺町の野はづれに寐て居る折ふし馴染し女郎通り合せ此躰を見るより。さてもく〜おいとしや我ゆへかゝるあさましき形にならんしたかどすがり附でなき出せば。コリヤ〜聲が高いおれはな敵打に出て居るのぢや。(輕口 浮瓢賣)

### しやくりの妙薬

れツきとしたる武士住吉へ參詣せらるゝ道にてふと志やくり出て止ず難儀なる折節道端に寐て居たる非人むく〜と起上り親の敵のがさぬと詰めよれば彼の武士大きに驚き。身共は人を討たる覺なし必はやまるなど申さるれば非人いふやう。志やくりが直ツたら一文下されませ。(同上)

### 偷盗門

### 柿盗人

若いもの二人言合せ。今夜は暗だから隣りの柿の木をはたき落さうがあれが木へ登るからおめへは拾ひ役だどやがて棒を持ちたくと柿がごろ〜落るに下の男あはて〜拾ふ拍子に溷へあちてあがられぬ故。チイ落た〜。「上の男」おちる筈よだまツて拾へサ。「下の男」おちた〜。「上の男」うるせへ男だな。「下の男」いやさ溷へあちたよ。「上の男」どぶ〜落たのは棄て置け。(五返會作 昔話)

古 ぬす人にも禮儀あり  
 諺 舟ぬす人を陸歩で追ふ

貧乏者

盗人夜半ごろに忍び入りだん／＼見てまはるに簞笥にも葛籠にも衣類どてはさッぱりなく米櫃には米がなく味噌桶にはみそがなし見かけどちがッてひどい貧ぢやと餘り氣の毒になり夫婦をゆり起し。おれは盗みにはいつたがあまり貧な様子なんとも笑止なゆへ合力いたさんと金子二百疋出してやれば夫婦大いによろこび厚く禮をいッて別れ一二町もゆくどあとから亭主。どろぼう／＼と追て來るに。おのれは恩を仇で報ずる人畜め眞ッ二ッにしてくれむと立どまれば亭主ちかより。アノーお煙草入が落て居りました。(氣の樂)

さんもんに住て千金なギと言ひ  
細のいるぬすびとでなし燕子花

あべこべ

ある獨身者の所へぬす人はいり押入へか／＼ッて葛籠をあけて見たところが残りにもし錢箱を引出してもからッぽなり小籠笥のひき出しまで残りなく索せどもなんにもなしこいつは思々しいと小言いひながらがたびしすれば亭主目を覺し。ヤレ泥坊／＼と呼はるに盗人はそつと片隅に隠れると亭主らうそくを灯し見て。さて／＼ぬすみあつた小袖も残らず錢金もみな／＼なツた此通り大家さまへ届けやうと出かける所を以前の泥坊亭主の首筋ひッつかむで。うぬふてへ奴だ何もなくて金をとられたの着物がなくなツたのと嘘をつくその分にならぬとねぢつけられ。亭主「ハイ／＼御免なさいあのやうに申したはつひ私の出來心でムいます。(一九作書名未詳)

偷盜戒

花折れは思はぬ枝へゆれの行く  
玉さいは、それも拾はト草の露  
其堂  
もこ風

### 古道具屋

盗人が道具屋の見世へ来て大小をぬすんで差し一さんに駈出すを隣りの亭主見附て知らせければ道具屋追ひかけてゆきしがしばらく過てすどくと歸りければ隣りの亭主。ヤレ、泥坊は逃げのびましたかど聞ば。イエ、二三町で追附ましたが先も武士めつたな事はいはれませぬ。(天明版 ぶくら巻)

### 盗人の逆おひ

獨身者ぬいりし所を見すまし盗人壁を切破りそろくと追入りし時亭主目を覺し棒おつとつて追ひ駈けしに盗人道よりとつてかへし脇差をぬいて追かへす亭主一さんに我家へ逃行く盗人は彌おひかければ壁の穴を潜りながら。てうどよい逃道があつた。(未詳)

盗人の水かけて行く蚊道りかな  
ぬす人もあさして行く寒さ哉

### 走くら

どろばう命限りと逃るを跡から韋駄天で追かける十四五町かければ互ひに息きれ傍なる茶屋へかけ寄てものをいはず二人ながら水をのみて休む。サア、よくば逃ろおかけやう。(未詳)

### 銅藏

盗人が土藏に穴を切る音がするとて亭主十能をもち行き壁をきりまはすむかふへあてければぬす人叶はず又わきを切まはす又其ところへ十能をあてたれば盗人不思議なことぢや鐵か銅にあたるやうで少しも切れぬとつぶやきければ内より亭主が。なんどていぬいな普請か。(延享版 笑布袋)

白浪に千鳥は高く音をばツし  
生煎への時五右衛門は一首よみ  
束帯のなかへ袴でまざれこみ



### 盗人

ぬす人の用心に親爺土藏へ寐るそれでも盗人来てやじりを切りまづ一人藏の内へ入れれば外の一人は持出す道具を受取る手筈で隣居り居たり時におやぢ目をさまして壁に穴の明たるは合點ゆかずと件の穴より頭をさし出したるに外に居るぬす人。ム、やくわんからさきか。(明和版 鹿の子餅)

### 盗人に錢

ある儒者の所へ盗人來り壁の間より手をさし入れかけかねを外さむとする所を弟子衆見つけて其手を捉まへ釘にて打附んどひしめきければかの儒者與より立出よしなき事をせらるゝなどて錢百文を盗人の手ににぎらせ。重ねて來る事なかれとて手をはなせば盗人歸りさまに。鮮矣仁といふた。(浮城草)

### 盗人の戀風

まんまとやじりを切て這入て見れば辨天さまのやうな女がたつた一人を續むで居る襟元のうつくしさ盗人もゑりもどがソツトしてどうも堪忍なりがたくそろりくど後へ回して。もしへくといへば彼の女ふり向て。誰じやといふ盗人指を啣へながら。ぬす人ですよ。ナニうそばツかり。盗人、くはへた指にて額へつばをぬり。大誓文。

(蝶夫婦)

### かける名人

追かける名人ありある時盗人をあひかけ行くむかうから友達來りなんだく。どろぼうを追かける。その泥坊はどれだ。アレおどから來る。(文政版 咄安賣)

盗人の畫

暮れなば人にもちぎりて夏の夜の寝顔の夢や日影わぶらん

唐衣橋州

### 釜 盗 人

ぬす人釜を引さげて出るあとから亭主見えかくれにつけてゆけば筋違の見附から日本橋へかゝり京橋新橋をすぎ芝の田町の古道具屋へ寄つて釜をおろして。ナント御亭主この釜をといふところへ。泥坊泥坊と聲をかけられ雲をかすみと逃たあとへ行て釜をどつて歸るを道具屋わけを聞て。さてくお前は氣のながいお人ぢや駒込からこゝまで附けてお出なさらずとも盗て逃るときなせはやく聲をおかけなさらぬといへば。イヤく持て居るうち聲をかけるこの釜を投り出します。(氣の藥)

折りさるは憎くさもにくし心根のわゆくもある花のぬす人  
 よい梅と梅盗人にほめられし  
 大屋裏住  
 花盗人とももの事に宿食さむ  
 四 釜  
 湯あがりや鬼灯ぬすむ爪鉄  
 車 月 笠  
 來

### 臆 病

臆病なる盗人ちどかせいで來やうと黒装束にて出かけ或表店を伺ひ見ればまだ話の聲。こいつアいつ寐やうも知れぬへと其隣りを窺へばもの静ゆへだんく戸をこぢはなして遣入て見れば明店ゆへ盗人息をついて。まづ首の氣づかひはなし。(未詳)

### 月 夜 釜

身上左り前となり金銀諸道具は勿論衣類とてなく唯一人うす蒲團を着て寐て居るとも知らず盗人はいり簞笥の引出し又は押入戸棚など探し見れども襦袢一枚なし、ぬす人も興さめがほにてつぶやく折節亭主ふどんの中よりあまりのおかしさにクスくど笑ひければ盗人聞つけ。これが笑ひどころか。(安永版 咄角力)

### 盗人の辭世

盗人をとらへて手打にせんとする時。「盗人」しばらく待てたへ辭世の歌をよみたいといふ。それは奇特なことじやサアよめ聞うといひけるに。

かゝる時こそ命のおしからめ

かねてなき身と思ひ知らずば

と吟じければ人々聞て。それは太田道灌の歌ぢやが。「盗人」へいこれ  
が一生のぬすみ納めでムります。 (梅やしき)

### 遊里門

#### 昔のなごり

さる大名しゆのおさえ御江戸のよし原へぎうにすみけり折ふしけい  
せいの供をして揚屋町へ行ける道にて客四五人とほりかゝり此あり  
さまに見とれ供の者をつかはして何屋のけいせいにて名はいかにど  
問すれば彼のぎう聲はりあげてさも仔細らしく、○三浦長門引とむ  
かしの押えのこゑにていふたも武士めいておかし。(元禄版 露がはなし)

#### 青樓四季の歌

別山人

春 夏 秋 冬

玉くしけ 箱挑灯のふたりつれ 花のなか行くはなの全盛  
短が夜を比翼むしろの天窓絨の毛羽立まなくぬるよしもかな  
琥珀の 櫛のひかりや びいごるを 逆きにつるす燈籠の 變  
(故ありて省く)

初會

初會にて待どもくらせども女郎が來ぬゆへ業をにやし夜着蒲團をは  
じめ簞笥そのほか道具を廊下へなげ出すと女郎のなに事かと駈け來  
て。ばからしいまアなにをなんすといへば、きさつきからぬしが見  
えぬから尋ねて居る。(未詳)

ゆ び

久しくなじみける女郎のしうちあしき事あつて客はらを立ておれが  
いつぞや切てヤツた小指をかへせもう再びうぬが所へは來ぬといへ  
ば女郎も同く腹を立てそんならもう來なんすなど苦笑ながらづつと  
立て簞笥から大きな紙袋を取出し。此内でぬしの見分なんし。

(文政版 咄安貞)

は か ま

袴を着たまゝでなじみの座敷へずつとはいり。今日はあふるまいか  
らずつと來ての大きたびれといひながら袴をぬいでついで投げて置  
ば。「おいらん」もし新造さん方あの袴をそでたゝみにしてをきなんし。

(喜三著 柳巷証言)

眞

玉屋へなじみの客人來て女郎の机を引出しているくむだ書をし眞  
をかきながら。この眞といふやつが女郎などのかゝれぬむづかしい  
物だといへば。「女郎」ナニサしんを假名でかきんす。(同上)

思ふこゝ秋ではくすす炭火かな 宮路  
ゆく水のひさ夜さまりやうす氷 ばせ川  
香々のまつ身につらき水鷄かな 若菜

鶉

女郎鶉を飼、籠の中にてチ、ツクワイといふ。「客」この鶉はよく鳴どほめければ。「女郎」おやばからしうありんす鶉はふけるとこそいへ鳴どいひんすものか。客指をくはへ其後地主の隠居に咄しければ。それはきさまのが眞實だ既に以て融の切りにうづらなく若草山にといふ謠がムる。さやうなら私が利でムりますか。いかにもく。さて其後行き初めにも懲ず。この鶉はよく鳴くとほめければ。ぬしは物覚えがわるいあれほど先度お出なんした時に鶉はふけると教へ申したに。イヤそなたが文盲だ既に以てうづらなくわか草山といふ謠がある。チャ夫は何の謠に。これかモールの切に。

ふられるも且は其身のお爲なり  
 ばられる女郎あいそくに腹を立

(文政版 唯安賢)

くさめ

息子女郎買に行き居つけをうちくさめをして。ハツクセン畜生めどいつか己が噂をするやら。アレもツたいない大方親父さんでありんしやう。(安永版 稚獅子)

箱

吉原の女郎なじみの客にむかひ。モシエぬしの紋とわたしの紋を比翼の蒔繪にした多箱がほしうありんすといへば。それは實持てくれる氣ならあつらへてやらうと宅へ歸てさうく塗師屋へいひつけ間もなく出来ければ眞紅の紐をつけて持せてやりその後よろこぶ顔を見むと大門をはいると向ふから禿がかの多箱を持って来るゆへさだめておれが所へもつて来るのであらうとそろく禿の跡より行見れば餅屋へはいり。十二文があんころを。(未詳)

うぬぼれ

ゆうべよし原へ行ッたが初會から百年もなじむだやうになんだのか  
 だのとあつなことを言ッて是非おれが女房にならうといつたが豪勢  
 だらう。そいつはたまらねへまた行てやんねへどそやされ。イナ今  
 宵すぐに行くつもりだと風俗意氣にこしらへスーッと登ると相方の  
 女郎。モシへわたくしやアね昨晩はいつそ酒に酔てぬしに何を申し  
 したかさつばりと知りいせんよ。(二九番 商内上手)

いき過

女郎屋の嗅なにやら腹立で女郎をさんく打擲しければ女郎も髪を  
 亂し泣さけびける折ふしその女郎のなじみの客來りけるゆへも髪を  
 檻をやめ女郎もよい幸と泣顔ながら客の前へ出るに客は女郎の泣顔  
 を見て。これはきつい愁歎かな、どうしておれが國へ行く事を知ッ  
 た。(安永版 稚獅子)

うぬ惚

うす白粉に青黛をつけおれ一人色男と思ッて居續けをして居る。女  
 郎は外の客が來たゆへそこへ行。新造が其の内二三人來ていろい  
 ろねだり喰をして弄されるも知らず。コレおいらんは如何した。ア  
 イいま手水にお出なんした。イヤ手水ではあるまい。コハばかりし  
 いぬしを措てどこへお出なんせうあらほど惚て居なんすものを。又  
 うそ計り。誓文、おいらんばかりではおツせん外にも惚て居る物も  
 あるけれど思ふやうになりんせん。コレだれだ座敷持のうちか。イ  
 ンエ。部屋か。インエ。新造衆か。インエ。そしてだれだ。おまへ一  
 人で。(寛政版 喜美談語)

うぬ惚は遊女のためのも後ろ冊  
 金銀を取られた跡の歩あしらひ  
 きに惚たさは山吹の事だろり

齒のあと

紫好、ゆうべ北國と出かけた。どこへ行ッた。丸海老のげんさいが  
 どころへこの盆前からゆくがゆうべは少しほかにきまりがあつて加  
 賀俵へあがらうとする所をめぐつて髪を切るの桶伏にするのとい  
 ふ所をわれらがちよ／＼を言ッてやう／＼中を直ッたところがこ  
 れこのやうに肩先を喰ついた見てくりやれと肌を脱げ。よう思ひ切  
 てくいついた併しこの女郎は大きな口だ肩一ぱいに齒の跡がある。  
 ナニ大きくはないずるぶん小さな口じやがゆうべは笑ッてくいつい  
 た。(未詳)

城でさへ況んや蔵におひておや  
 惚たまれ上手にするではやるなり  
 あどけないやうで無心にぬけめなし  
 まよよかはよは居つゞけの合ひこさば

火事

禿かけて来て火事がありんすいッそさはぎんすといへば騒ぐなら近  
 いであらうと皆立さはぐにおいらんちつきはらッて。あの子やよ  
 く聞きや遠いのが火事ちかいのが手あいまちだよ。(寛政版 柳巷詠言)

み

客女郎をうたぐりいろ／＼な事を言かけ。どうも井筒屋の客人が覺  
 束ないど責る女郎もいろ／＼嘘をつけども承知せぬゆへ番頭へ多を  
 書て見せ相談する。「女郎」どうもぬしが覺束ない／＼と言ッしやるか  
 ら此通り書てやりんすが是でもまだおぼつくまいかね。番頭人物ら  
 しい顔で見ながら。是ではよもやおぼつきやせう。(同上)

つり針のやうな紙へで客を呼び  
 文で借りて手紙へ招き出し  
 證み使ひ息子をばすに招き出し





燈籠見物

田舎者女郎屋より燈籠見物に廻りさらばもと登りし家へ歸らうと思ひしが家名も方角も忘れやうく少しの目あてを思ひ出し若いものを呼出して。先刻淺紫の羽織を着て燈籠見物に出た客があるかと聞ば。なるほどお出なされましたがまだお歸りなされませぬといへば。その客はあれか見てくりや。(安永版 稚獅子)

いきすぢ

コンおれは此頃新町がしのだるまやといふうちへ行くてめへも一晩つきあつてくれ。チ、ゆくべい、なんといふ女郎だ。葎の葉といふ女郎よ。さぞ手のあるやつだらう。ナニサだるまやの内手に手もある女郎はないおれも今は悟りを開いたからむづかしいこともいはず只もちあそびに買ふばかりだといへば。へんもちあそびもすさまじく。おきやアがれ。(同上)

あご

頼間の五町前方たびく腮がはづれて大きに困ったとはなす。「客」それには良い薬がある。「女郎」ほんに良い薬がありんすかへ。「客」よ、あるとも。「女郎」五町さんはづして見なんし。(柳巷証言)

見たいもの

「新造」目吉さんどうぞ見たいものがありんす。「目吉」なんだ。「新」人に言ひなんすなへ。「目」だれにもいふ事ぢやアねへ何が見たい。「新」わッちやアまぐろの顔が見たい。(同上)

地廻り

「女郎」地廻りはよるくどこから來んす晝はどこに居るへ。(同上)

つぼね見世 せはき所へ來る客に 三尺もあり六尺もあり 客もよく さら居の数のふる狐 稻荷長家に 化けた新造 局見世 はるの夕藥紅さして ひくまゆすみの三日月お仙

米 龍 園 東 海 堂 幸 存



# 格子

女郎茶屋の若い者に客への多をわたし。けふぬしに逢ひなんしたら  
 よくさういふてくんなんし幾度多をヤツても来もしなんせす返しも  
 しなんせんあした来なんせんけりやおまへの許の格子までいきんす  
 といふてくれなんし。(安永版 新撰はなし)

相 ぼ 筋 格 子 外 出 附 け  
 手 の 筋 を 格 子 の 外 へ 出 して 見 せ  
 こ れ は 二 度 目 の 高 尾 納 子 町  
 傾 城 の 二 度 目 の 高 尾 納 子 町  
 間 柿 二 度 目 の 高 尾 納 子 町  
 む す こ 思 へ 濟 ば お 廊 下 切 仕 け  
 四 五 兩 で 濟 ば お 廊 下 切 仕 け  
 命 へ 炎 は 虫 の 根 を 切 仕 け  
 も て ん さ す べ っ ぱ り っ ぱ り っ ぱ り  
 ま っ て な く き っ ぱ り っ ぱ り っ ぱ り

### 薄雲が猫

京町の猫通ひけり揚屋町といひし頃は吉原の女郎すべて猫を飼しと也、わけて三浦屋の薄雲は猫をだいにし猫もうす雲に束の間も離れずつき添ひける、其頃藏前の何とかいふ客人にて殊の外自惚の見え男ありて薄雲に通ひけれども大盡風のいやみ男なれば薄雲心そまざさりながら薄雲はうき川竹の流れの身を知りて座敷のみなれどあしからず待遇けり、ある日も帮間末社に取はやされてだいら大盡は我なりと例の利た風に、新造禿までも此客人のしこなしを憎みて互にさしやき指ししけるうち何とかしけん猫は薄雲の膝をはなれて客人の膝へ上りぬ、されど客人は大の猫きらひにて直にもどりのけたけれど薄雲に悪くおもはれなんといや／＼ながらよき猫かな／＼と頭をなで居ければ猫はやがて客人の顔へかしらをすりつけるに客人身

の毛立ほどいやなれども薄雲がかほを見ながらたまよ／＼となで居るうちいきなり猫は客人の口をなめければ客人いまはたまりかねて膝よりヤツと取り除たれば猫はさう／＼薄雲が膝へゆく、薄雲いそぎ。うがひ／＼と言ひければ新造かむろをよんで。はやく合嗽茶碗を持って来やといへば客人。なにサうがひには及ばぬへよと言へば。「新造」ぬしちやアおッせん猫の口をあらッてやりんす。

(慈悲成作 延命妻談)

### 猫

臺所にて猫が赤貝に足をはさまれ無性にかけまはりしがやがて二階へかけあがる音にやり手目をさまし。コレ下駄をはいて上るのはだれだ。(お伽話)

京町の猫もしやくしも大名も揚屋にかよふさきの全盛 蜀山人  
 行年や古傾城のはしり書き 几董  
 二階から田植見て居る遊女談 護物

けいこ

居ついでけのとなり座敷で。もうかんにんがなりんせんあんまりであ  
りんすとうらむ聲ふすまのすきから覗て見れば鏡にむかひ手まへの  
むなぐらをとって赤筋はッての獨り言。重山さん何をしなさるとい  
へは吃驚して。コハかならず人にいつてくんなんすな手練手管のけ  
いこぎます。(氣の藥)

手前勝手

おれは女郎に望みがあるまづ初會から大門まで送て出て幾度行ても  
床花をやらすなむむでも物日約束は勿論無心がましいな事をいはぬ中  
三の宜い女郎が買ひたいなんどあらうかの。「茶屋の亭主」なるほどさや  
うな女郎衆もムりますすがその女郎衆はしまひに助太刀をたのみます。

單筋から下駄とは別な世界かな

(氣の藥)

全盛の太夫さま

ぜんせいのお太夫揚屋の二階へあがり。なふかなしやと階子よりこけ  
落ければ揚屋夫婦やりて禿太夫をだきかへ水などまゐらせ。お氣  
がつきましたか何でお肝をつぶされましたと問へば。サレバ二階の  
上り口に蛇のやうな物がのたくつて居たによつて怖ろしさに氣をと  
り失ふたといへば亭主そのまゝ二階へかけ上り見れば銭が百あちて  
あり亭主見て。さすが太夫さまほどありて銭を御存じないと感じて  
大盡衆へ沙汰しければ。やさしい太夫ぢやと殊の外評判してはやり  
ければ一家の女郎にずあぶんはやらぬがありてやり手が智恵をつけ。  
花車な女郎ぢやとはやりますやうにおまへもわしが揚屋の二階に銭  
をおとして置くほどに花崎さんのやうに肝つぶさんせと言合せて扱  
あげやへ行き件の女郎二階へ上り。なふかなしやとこけ落ちければ

宿の夫婦やり手これはどよりまはし。太夫さまくどよべば氣のつ  
いた顔して。ア、怖ろしやノッ。やり手仕組なれば。けうとい何に  
おそれさんした。イヤこはうて物がいはれぬアノ二階にノすさまじ  
いはした錢があちてあつた。(其戯作 獨機嫌)

せんべい

さる女郎うらに來りし客の座敷へ出て居たりしが一座もなくさびし  
き折から若いもの煎餅を臺につみて出す。これは氣がついたと茶を  
とりよせてのむ女郎もせんべいに氣があれども馴染がなければ取て  
くはれもせず禿をよむで硯を取寄せせんべいをとりては冗書をする  
ゆへ客これを見て。何を書きたまふぞ定めてうつくしいお筆であら  
ふチト拜見とさし寄れば女郎。はづかしうありんすと手で揉むで口  
へ入れる。(安永版 稚獅子)

お盆

ある人女郎買に行しにまんまとふられ女郎つんとすまして居るに。  
コッおいらんどうしたのか。アイわッちやア癩がいたくッてなりイ  
せん。そんならおれが良い藥をやらう。マアちッとかうして置てお  
くんなんし藥もいろくたべいしたがりいせん。マアこれを飲で見  
など萬金丹を三粒ばかり小判にのせて出すと女郎にッこりしてこち  
らを向き。チャこりやア好い藥さますねとボチノ、かみくだいて飲  
み。モウ癩はよくなりイしたどうち解る客その小判をひッたくり。  
そんならお盆はかへしな。(二九作 癖の賊入)

閉帳

女郎屋の若いもの開帳まゐりしたところが閉帳ちやと押合ふ。どう  
も内へはいられぬから外で拜むでフィト下を見れば一歩銀。これは  
ッと拾て押いたいき。おやすみなさいまし。(梅屋敷)

いんす

吉原はいんすりんすのなくてならぬ所なればこれを氣儘にいはぬ願  
 を出して會所を立て賣物にせばよき金もふけならんと願ひ叶ひけれ  
 ば大きなる看板を出しいんすりんす賣所と書きければ毎夜うれるこ  
 とおびたいしく殊に大晦日はりんすいんす澤山入用ならんと仕込  
 きければ案の如く困りんすが大きくうれ夜更ぬうちに賣切れたり其  
 うちあるおいらん是非く困りんすが入用ゆへ買ひにやれば取て置の  
 がたツた一ツあるが大分直段が高いといふ。イエモウそれは二分で  
 も三分でも構はぬ。どうしてそんな事ではない百兩でムりやす。ッ  
 ャばかりしい百兩の金があれば困りんすは入ぬ。(安永版 青樓話)

巻紙もやせる苦界の紋日まへ  
 掛取のやせるもの前紋を出し  
 氣掛しめんすき寄掛る空軍箱

隠居

四五會めに。おれは隠居したから度々は來られず物日の仕舞も受け  
 られず物前に金もやられぬが其外の用は何でもきかうと言ば。(女耶)  
 それではわたしの申ことはありんせん何ぞ一いろはきいてくれなん  
 せねば遣手衆や旦那さんの前へわるうありんすといへば。なるほど  
 そんなら一年中つかふ茶附子と揚枝をすけやう。(氣の藥)

猫

床の置物にいたしんすから銀の猫をトねたられ痛事ながら請合て歸  
 り銀では高く上るから減金にして逃へ出來上ツて持て行ば女郎うれ  
 しそうにそばに置てつくくながめ。モシく此猫は人をにらみん  
 すと言ふて疊のへりで鼻をこすツて見た。(未詳)

十の字

くやみに來ても寄りかゝるは傾城のつねまして無心いふ時のしなやかたまくの事なりやなま返事にもならず。のみこむだとの安受合してまたいくらほど入ると聞けば。それは顔を合はせてはいはれんしんといふに。そんならおれが背中へ指でかきたまへど大肌ぬきになつて背中さしむければ。そんならかきんすによとまづ一の字を人さしゆびにてしつかりと書く。よし合點だとうなづくところ十の字の堅の畫ちりけの所へ指をつけると客身をひいて。ナットそこに灸がある。(明和版 鹿の子餅)

紋日前かよはぬ神に崇りなし  
 紋日前城より首をかたむける  
 座敷持琴はあゝして匠はかり

雑纂門

うツけ

腔たる者人にむかひて、我は日本一の事を工み出いたわといふ。何事をかど問ふ、さればよ臼にて米を搗くを見るに勿論下へさがる杵は役に立つが上へあがる杵が徒らなり所詮うへにも臼をかり米を入れてつかば雨ともに米しろみ杵の上下そつになるまひと思案したりといひもはてぬに、扱つり下げたる臼に米の入れやうはト問へば、實に其思案をせなんだよ。(萬治版 醒醒笑)

野野そ  
 ががら  
 げげな  
 け道れ  
 親和め  
 仁尙く  
 の以辨  
 豊て當  
 後のう  
 初ほち  
 つかで  
 にふ喰  
 聞ざひ  
 きけ

### 火の見櫓見立

田舎者三人つれにて江戸見物のために来りしに、まづ屋敷々々を見歩きけるが、火の見櫓を見つけ、一人のいふやうは。國元にて聞及びし雲の上人様といふは是にてあろうといふ。一人が申けるは。見れば侍さうなほどに天竺浪人といふもので御座らう。中にも年の寄りたるもの申けるは。屋敷になに浪人があらう上に太鼓があるほどに雷の下屋敷だといふた。(元禄版 鹿の巻紙)

清盛の扇のほしい花の山  
 総を逃して家根の谷波り  
 飯櫃へ顔をみつこむ強い暑氣  
 人を汲出すと井戸替仕舞なり

### 鹽賣の借上

ある鹽賣り寺の前を賣りけるに、即よび入れて、先づ鹽をば買はずして。さてくそなたは鹽などを賣りさうな人にてはない見所があるぞ賞むれば、鹽賣り申すやう。さてくよい目やそこな折敷を一枚下されとて鹽を三升はかりでさし出す。是はといへば。今日は伯父の頼朝の日じやといふた。(寛永版 きのふは今日の物語)

風鈴もだんまりで居る暑い事  
 暑氣見舞脊中をむけて此通り  
 歌は顔書物は腹を日にさらし  
 叱られた事もこひしき祭り  
 來る人を虫が知らせざるの庵  
 秋風の吹くにつけても給  
 聲色は誰ださしかる施餓鬼舟





### 雨乞の紙装束

元祿酉の夏は大旱にて國々在々にて氏神へ雨乞をしけるが或在所に  
 て雨乞の踊りをはじめさま／＼の出立、こゝをはれと奇麗なる装束  
 をしけり、其中にずんど貧困なる者ありしが人並に結構なる出立を  
 したしといろ／＼思案して金から紙のよき模様なるを買て装束にこ  
 しらへ着て出ければ、あたりに輝きて一番の出立に見えて村中の人  
 人肝をつぶし手を打てほめけり、其時此すり切者自慢がほにて、何  
 どぞ雨が降らぬばよいがと繰返しひければ、人々聞とがめて、い  
 な事をあしやる人ぢや大分物入てめん／＼かやうに出るも昔雨乞の  
 ためじやに、なぜ雨がふらぬばよいとは言やるぞと叱りければ、す  
 り切聞て、あゝ是はちらが言損ひじやさりながらちらが衣装は雨が  
 降たらば四十八枚にならふ。(元祿版 もらひまくほ)

## 紙帳もそれくの入れ物

心にかゝる山のはもなき武藏野といへど、月にうき雲すとしさはりある浪人、訪ふ人あればわぶとこたへて、年久しく芝浦のほとりにさすらひしに夏の比珍客ありて、素麵を調してふるまふとて辛子の粉を尋ねけるに、紙袋に書附けなく、あれこれとさがし、やうく取出し、もてなして歸しぬ、暮方に及びかしたからぬ子息よそより歸りき。親仁のいふやうは、あの紙袋にそれくの入たる物を書付して置け急ぐ時の用に合ぬといへば、心得ましたとてやがて親仁寢られけるとき紙帳に大筆にて、此内におやぢありと書つけた。

(初音草咄大鑑)

## ばか賣

年のころ二十二三な野郎がまるひたひで鼻の下が長くツてゆきの短かい着物をきて水涕をたらし盤臺をかついで。大ばかくど賣て來る。アレ見やれほんに大ばかくといふがあいつが面がばかの看板だと笑ひながら。ばかを買って喰ふコレばかやいくとよべと行き過るに大聲あげ。ヤイ大ばかヤイ大ばか野郎コレ買ッてやらうばかやいくといへばやうくと聞つけてのらく戻り。ばかはおめへか。ム、おれだ。(寛政版 こまばの花)

## 熊の膽

これくおぬシア犬をつかまへて如何する氣だ。チ、サ知れたこと熊の膽をとるのだ。田分め鹿ぢやアあるめへし。(未詳)

鈍漢の志るし

ある町の宿老喰荷を多年喰れしが、ある時町代を呼び言るゝに。世間にて茗荷を喰ば呆癡になるといふがあれは數年茗荷を喰たれども今日まであほうにならぬゆへ、この次第を町内へ觸れておぢやれと言ひつけた。(輕口 洋瓢箪)

髪結

月代の上手な髪結。あれはどのやうに動かしても切るといふことはない。高慢をいふゆへある客が。あれが思ひ入れうをいって剃せるが切らぬやうに剃たら蕎麥をふるまはふ。もし切たら私がそばをおふるまひ申と賭にして剃りかゝれば客はむせうにうごく髪ゆひも奇妙にはづして切らぬやうにしたれどあまりつよく動きしゆへ顔をそる段になつて鼻をぞッペリとそがれ鼻聲になつて。もう蕎麥は喰つたぞく。(十千萬兩)

ぬりま

馬つけ大根賣七ツおきして江戸中を引あるけども不任合にて一ツも口あけなくもはや日も暮れかゝりければ馬士うまにむかひいふやうは。今日はどうした事やら一本も賣さざかしわれもくたびれなるべしこれからあれが代つて脊負んとて大根を下し一ツに束ねてせおひ。あれも足が棒のやうだからわれに乗るぞ。(咄自慢)

言葉どがめ

めんきよ内にか。この寒いのに内に居ず外にぬられるものか。エ言葉どがめも久しいものよそれはさうと強ふ冷に實が入つたの。フムひへの花はいつさいた。(梅やしき)

京都

江戸ッ子京へかけおちしてゆき公家のうちの居候となり公家の名代にたのまれ冠り装束して行ける道にて江戸の親分やまと廻りに來りしとて三條の大橋にて行合ひければ。「親分」これ手前は公家衆になつたかだいぶ出世したなどいへば。ハイけふは公家衆にたのまれやしてト冠へ手をあて。かぶつて居りやす御免なせへ。(五返舎作 昔話)

富士山

青空や富士は日本の立烏帽子といふ句があるがア、いふ大きな烏帽子があつたら装束に困るだらうといへば。そんな狭い事をいひなさんな國一ッですはうといふがあるぢやないか。(可樂作 百の種)

壺

そさうもの壺を買に行たところがうつぶけてあるを見て。此やうなべらぼうな口のない壺があるものかと言ひながらひっくりかへし。底もぬけて居る。(未詳)

むだ

猪牙船に乗りし客命より大切にする百目ほどある銀煙草を淺草川へ落し南無三といふ船頭肝をつぶし。どこらへ落しました。こゝだ船頭尻ひツからげ。こゝかへ〜と言ひながら指に唾をつけ舟の小べりへしるしをつける。(文政版咄の安賣)



# 菖蒲皮

近頃は菖蒲皮がきつい流行なんでも諸事菖蒲皮だと内儀も娘も下女も下男ものこらず菖蒲皮づくし上着から間着下着襦袢はいふに及ばず履物の真緒茶碗辨當箱供の者の股引までが菖蒲皮で飛鳥山へ花見と出かけしるがよき場所を見て毛氈を敷やがて大勢の菖蒲皮がずらりと居ッて辨當をひらくを見れば焼飯が三角しかし是ばかりは菖蒲皮にならぬと覗て見れば、三角のやき飯を二ツ食たり三ツ食たり。

(文化版 江戸嬉笑)

黒犬を提灯にする癖の道  
 來年の楫へ手の附年忘れ  
 取次に出る顔のないうの葉拂  
 山吹を見せす断はる年の暮  
 懸取の笑顔を右の通りなひり  
 家内安全息才で居蘇を買ひ

ぶせう

田舎親仁都會へ出ての歸るさ風呂敷包をせあひ懐手して堪づたひに  
 來るに甚空腹になりければ包の中の握り飯出して喰はんと思へども  
 折角懐手して居るにそれも面倒と思ひ居る向ふよりこれも空腹らし  
 き男菅笠をかぶり大きな口をあいて來りしかばさだめて飢じき故な  
 らんと思ひ。モシ、旅のお方わしの包を下して握り飯を出しッ  
 テ口へ入れて下さらば御禮心にあなたにも二ツ三ツは上げませうが  
 といへば。「たび人」そんな手間があるくらひならこの笠の紐をむすび  
 ます。(安永版 咄角力)

同

不精なる男四五人寄り。なんと此連中申合せぶせう會といふを催ふ  
 さうぢやアないかといへば中の一人が。よせ、面倒臭い。(未詳)

初旅

ある所に初めて旅をする人あり旅功者な人見舞に來て、すべて道中  
 筋心得になる事共をしへけるが。まづ乗合舟などに乗る時は他より  
 先へ乗てずあぶん廣がりて場を取て居らねば後には狭くなつて困る  
 ものぢやといふに。彼の男委細のみこみ出立なしやがて伏見の夜舟  
 に乗り仰向に寐て十分場廣くなつて居けるがしばらく過て大きに草  
 臥れ。ア、是は續かぬチト起て休まう。(未詳)

わづかても旅もおもへば長繩手あちらにもまつこちらにもまつ  
 杖のみたのみし人のわかれにも ついて行れぬ 名残をじさよ  
 今朝はしや 烏さしもにおき出て なかぬはかりの旅はうきもの  
 草まくらむすびなれても 露の身の 心ほさけてれる夜すくなき  
 旅むかひ眞面目な顔でさて待た  
 名所より我家をほむる旅かへり  
 旅かへり草鞋で覗くまくら蚊帳  
 江の島はうい物さいふ旅でなし

玉丸 常恒 葉廣 空綱

# 賣ト

子供大勢賣ト者の店先で爪をあげながら。こゝの占ひのあたらしぬ下手だどあくたいをいふ、占ひ者腹を立。こいつらは毎日見世さきで爪をあげるさへあるに惜いやつだうぬらは何所から來ある。「子供あてゝ見な。(安永版 鳥の町)

夏の日は龜よりもなほ炎天に おのが脊をやく 辻のうらなひ  
見料の 多少によりて賣ト者 手のうらかへす 筋のいひたて  
縁談は むすふもきるも問ふ人の 口うらなひを ひける系脈  
立つ人のちりてもつひに實をむすぶ 梅花易者の 判断ぞよき  
道樂に 見るさし聞けばにきりての 客もひらいて出す手の筋  
あさなへる なはいかめしき易者すら己が福祿は分らさりけり  
おのが身のよしやあしたの事さへも知れぬにけふも人を占なふ  
片手間に 手紙もかきて狀ふくる 口に糊する 辻のうらなひ  
提燈を 襟にもさすか賣ト者 みちにあがるき 顔を見せけり

東藩亭 鷓 群  
蘆の屋 一 本  
竹林舎 虎 住  
駒の屋 好 友  
秋の本 月 慶  
夏の屋 鈴 志  
秋亭 香 菊  
繪馬 屋  
竹の屋 干 尋

# 素麵

あはてもの二人より合ひ一人の男素麵を見て。大層ながい元結だといへばいま一人が。これあはてるな元結なら半分赤い。(今人 牛子伊)

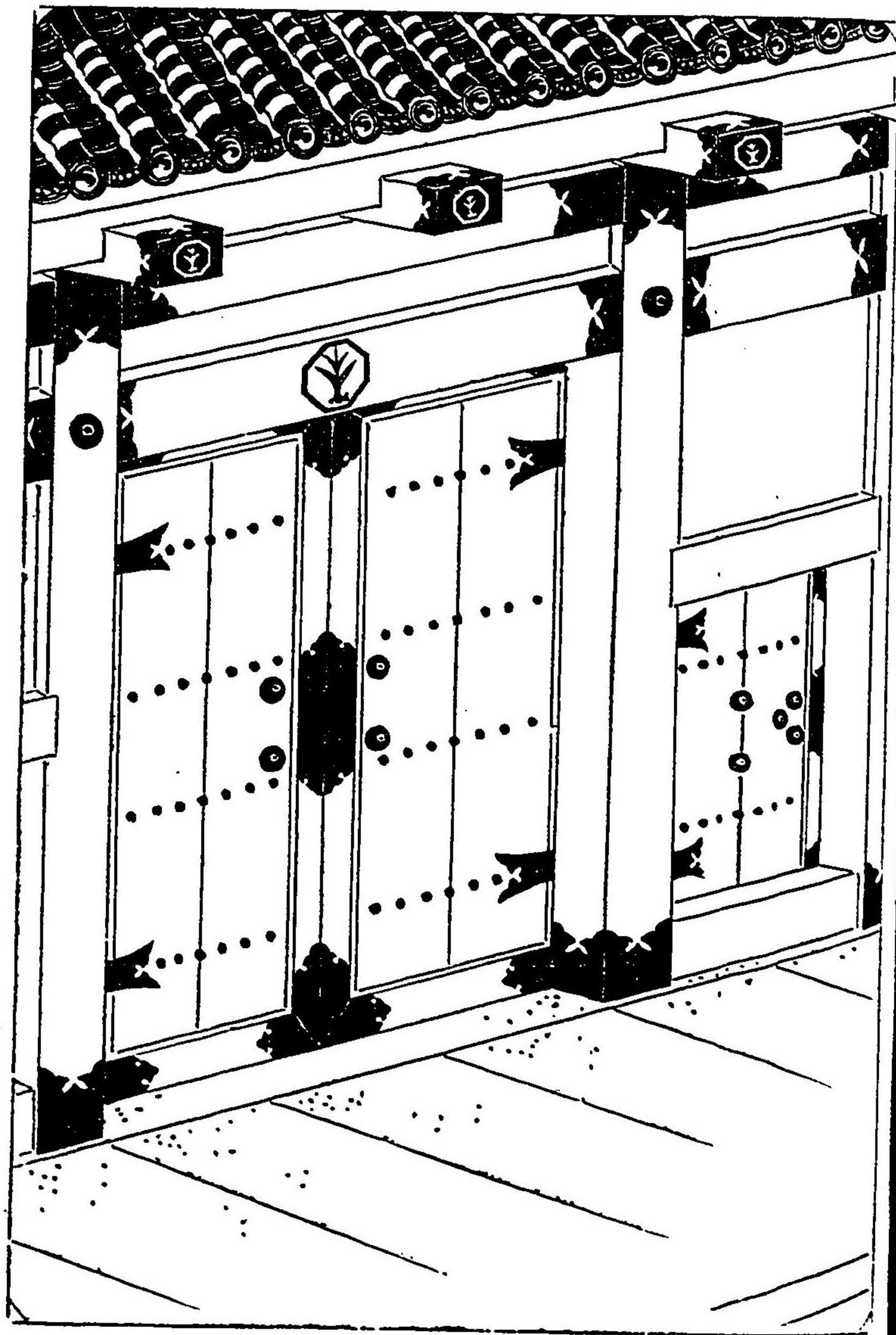
# あいさつ

久しぶりて知己の人に遭遇ひ。コレハ源兵衛さんしばらく。コレハ六右衛門さんしばらくしかしいつも御機嫌よく昔さんお變りもムいませんで。へエありがたう貴方でも。へエありがたうまアかうと丁度三年お目にかかりません。さやう私も丁度三年お目にかかりません。(今人 狸々庵作)

## 生 醉

生醉往來を大きな聲して唄をうたふゆへ巡査が制しても一向にきか  
 ず據なく警察署へつれ來り一晩泊置しに翌朝目をさませしがまだ醉  
 心に手をたゝきて。これかゝアどん水を一杯くれなどいふゆへ巡  
 査來り。これくといへば、生醉居三味を直し。へエ何も變つた事  
 はムいません。(今人 柳の屋作)





「なんと皆の衆、今日の藪坂様の御話しは、皆もう面白い事ではなかつたか。あの様な面白い話。私等は今まで聞いた事がないぢや。定めし作者は何處ぞの御隠居方であらうな。」い、やそれは鑑定違ひ、この作者は隠居どころか、つひ此間まで部屋住であつた、あの紅屋の藁兵衛さんぢやがな。「はてさておあかいに感心な。トコトコ〜」

と、一席前座を勤むる者は。例の

少年屋小波

## 藪坂慾の守

京の藁兵衛作

聞るがまゝの筆ずさみ、虚か實か諷にも知れぬが花の御長者に、藪坂様とか仰せらるゝは、如何なるお星のまはり合せにや、御身分にも似合せたまはず、それはくきつのお慾の深い殿様にて、只もうお蓄財おそばすのと、四方山のおはなしを、お聞になるがお道楽にて、今日しも御家老の三太夫をお相手に、前町の商人等へお貸附の金利などを御勘定に相成ながら。

「ノ、三太夫、なにか面白い話しはないか」

とおせがみおそばせど、三太夫はもはや嘶しの種切にて、ほとくすベツこき頭をなやましけるが、そこはまた何處やらにか、秋刀魚は目黒に限るといふやうな所謂お大名氣質のなきにもあらねば、

大時代の桃太郎や舌切雀と出かけたり。  
 嗚呼御先祖代々打物取ては向ふに敵なき御家柄に、當君はまた算  
 盤どッては一騎當世の殿様く。

(其一) 桃太郎

「三太夫く」。

「ハッ、ハッ」。

「さア早く、その昔嘶とやらを聞せへ、たどへ不辯舌でも、其方のは  
 木戸錢とやらが不要で宜い」。

「やれく、それはお情ない御意で」。

「アハ、、これは戯れじや、ユレ、誰かある、三太夫に湯をとらせ  
 ろ」。

と殿は嘶が開たさに御懸の御意。

「ハッ、畏れ入り奉ります」。

と三太夫は衣紋をつくるひ。

「まからは申上げ奉りますが、むかしく成る處に、老父と老婆がど  
 ざりました」。

「ウム、なるほど」。

「老父は山へ柴刈に、老婆は川へ洗濯にまゐるを職のやうにいたして  
 居ります」。

「ム、宜い奴く、所謂俱稼ぎとやらうじやな」。

「御意でござります」。

「ア、その鹽梅では小金も出来たらう。シテそれから如何いたした」。  
 「ある日のこと、老婆のしきりにザブリくと、例のやうに洗濯をい  
 たして居りますと、川上の方から、大きな桃や小さな桃が澤山流れ  
 てまゐりました」。

「ウム、うまいな〜」。

「そこで老婆は、小さい桃は彼方へ行け、大きな桃は我方へ来いと申しますと」。

「ウ、慾を知らん奴じやな、構はずみんな拾ッてしまへば宜に、ウ、それから」。

「さやういたしますと、其中でも一番大きな桃が手元へ流れ寄りました」。

「まア〜宜かつた、それから如何いたした」。

「それから老婆は、それを拾ひ揚げまして、なんといふ見事な桃ではあるわいな」。

「コレ三太夫、躍ッては不可」。

「ハッ、畏れ入ります、そこで老婆は、早くまア家へ歸て老父様と一處に賞翫いたしませうと、エツサ〜と持てまゐりますと、恰好老父

も歸ッて居りました故、有枝有葉の話をしたし、庖刀を以て今や切むどいたしますと、ア、ラ不思議や一道の白氣立昇るよと見る間に、其桃がバツト割れまして」。

「ウム」。

「中から飛出しましたのが」。

「金銀の類か金剛石か」。

「イ、ヤ、男の子で御座います」。

「ヤレ〜、一人口殖えたのじやな」。

「御意で」。

「ア、それから如何いたした」。

「ところで、二人も一時は大きに驚きましたが、ア、高齢になるまで子供がなく、心さむしく思ッて居たに、年頃日頃の願ひが叶ひ、お腹もいためず、こんな好兒を授けたまひし天道様と、うれし涙を流

して喜び、桃太郎と號けまして、掌の中の球、簪の花と養育いたして居りますうち、實に光陰に關守なく、はやくも十五歳の春を迎へました。

「ウム、大きに手助けになつて來たな」。

「ハツ、すると、一日のこと桃太郎は老父母に對ひまして、お年寄れたお二人様に、暫時なりとも御心配を相掛ますのは誠に心苦しう御座いますが、男兒の本分として打捨置きがたき次第有之、鬼が島といふ處を征伐いたし、寶を取てまゐりたう御座いますから、少々お暇を賜りたいと願ひました」。

「ウム、た、た、寶を取にまゐる、そんな心配ならいくらしても可い、な、な、なんで心苦しい事があるものか、そ、そ、そして暇を遣したか」。

「ハツ、遣しまして御座います」。

「ウム、ゑらい、此親にして此子ありじや、そして、寶は如何いたした」。

「ハツ、畏れながらお急きおそばしますな、依て桃太郎は何卒兵糧として黍團子を拵へてくれると申し、これをば腰に纏ひつけ」。

「ウム、ますく奇だ、黍團子とは奢らんで宜い、シテ如何いたした」。

「道の程を急いでまゐりますと、一疋の大犬が、桃太郎の前へ、得意の犬匍匐に匍匐まして、桃太郎さん桃太郎さん、お腰にあるものはなんで御座います。ウムこれは日本一の黍團子じや。一ツ下さいお供ませうと、これで一個の家來が出来ました」。

「フーム、安いものじやな、黍團子一ツで家來が召抱へられるとは、ア、これ三太夫」。

「ハツ」。

「手はつくく桃太郎がうらやましい。」  
と御落涙の躰、三太夫は興をさまし。  
「これは御挨拶、痛み入り奉る。」

「まア、可い、それから。」

「ハッそれから今度は、又候猿と雉子とが囀子一で御家來に加里、  
威風凛々四邊を拂ッて、やんがて鬼が島へ打渡り。」

「ウム、た、た、寶は取れたか。」

「又向ふ鬼共打伏せ。」

「た、た、寶は取れたか。」

「降参なせと呼はり。」

「コリヤッ、そんな事は如何でも宜い、た、た、寶はどれたかよ。」

「ハッ、御意でござります、遂には金銀財寶山の如く分捕り。」

と聽や否や、御前はバタ／＼と椽端へ駈出して。

「馬曳けッ。」

(其二) 舌切雀

「三太夫。」

「ハッ。」

「なせ斯う金が出來ん。」

「ハッ、畏れながら御前、それは餘りお怒が深いと申すもので御座ら  
うかと、憚ながら考へます。」

「なッなッなぜ。」

「ト申すに御前などは何御不自由なく渡られられるに、此上にも此上  
にもと思召は、畏れながら小人の怒で先哲の言葉にも、怒多くして  
身を傷ひ、財多くして身を累す。」

「なぞ、申すは止せ、ヤレ、蔬食をくらひ水を飲み脇を曲てなぞ、申

すは負惜みじや、實に富人は州縣の本、上下の願る處で、古い戯歌にも

歌をよみ詩を作るより田をつくれ

なにがしよりも金貨がよし

とあるではないか。

「ハ、御博覽のことで、志かし川柳點とやらにも  
帯刀で紙屑を蹴る見苦しさ

など、ござりますれば、御身分の上を思召されて。

「エ、ツ、諫言無用じや。」

「チト御悠長に願はほしう存じます。」

「エ、ツ、聞く耳持たんワ。」

「處で、御前かういふ昔噺が御座ります。」

「ナニ、昔噺じや、は、は、早く聽かせへ。」

「ハツ、むかし或る處に老父と老婆がござりまして。」

「極り文句ぢやな。」

「長れ入ます。」

「宜いからあどを申せ。」

「ハツ、かねく一羽の雀を飼ひ置ましたところ。」

「無益なことをしたものだな。」

「ある日のこと、老父の不在に、老婆が洗濯物へつけやうとて、こまらへ置きました糊を、その雀が自分にくれたのかと思ひ、みな甜て志まひました。」

「ム、なるほど。」

「ところで、老婆は性質酷だ邪慳で御座りまするゆへ、大いに憤りまして、其雀の舌を切て放ちました。」

「フム、なるほど。」

「スルト、やがて老父が歸宅いたし、雀の姿が見えませぬ故、何方へ行たかと、老婆に尋ねますと、かうくだも譯をはなしましたから、仁者の老父は、流涕いたして之を憐み、雀に逢ふて慰むるところあらむと欲し羈旅の用意をいたして」。

「コレ、大分固苦しいな」。

「ハツ、然らば世話にくだいて申しませうならば、舌切雀、お宿はどこだ、チウくく」。

「ハ、ア、面白いな、いま一度申せ」。

「ハツ、舌切雀、お宿はどこだ、チウくく」。

「これは面白い、舌切雀、お宿はどこだ。それから何と申したな」。

「ハツ、チウくく」。

「ム、なるほど、舌切雀、お宿はどこだ、チウく、チウくか、アハ、ハ、ハ、ハ、夫から如何いたした」。

「ハツ、かやうに申して尋ね廻りますると、程なく宿元が分りまして、いまてうど、雀の醫師が草の根や木の皮を脚てまゐりまして、舌の療治を施してしまつたところで御座いましたが、右の雀を始め、眷族共一同、斜ならず老父の親切を打喜び、山海の珍味を獲し、やがて歸途に及びまして、雀共の申しまするには、何かお家産をさし上げたらう存じますが」。

「アーム、澤山馳走をした上に土産か」。

「御意で」。

「コレ、三太夫、予も雀を飼うよ」。

「アハ、ハ」。

「アハ、ハ、とはなんじや、して夫から如何いたした」。

「ハツ、貴老様はお年を召てお出なさるから、軽い方にいたしませうとて、葛籠を一個くれました」。



「フム、なるほど」。

「老父はよい心地に酔ひ、萬籠を背負まして、節もしろく小唄をうたひながら、宅へ歸てまゐり、その萬籠を開て見ますと」。

「ム、な、な、なにがあつた」。

「ハツ、七珍萬寶が一杯ございました」。

「ウーム、ウーム」。

「ア、御前、お氣を確固にお持ち下さいまし」。

「ウーム、だ、だ、大丈夫だ、シ、シ、シテ如何いたしました」。

「ハツ、スルト、さア前申上りました老婆が非常に羨ましがりまして、誰でもうらやましいワ」。

「ハツ、軽い方でさへこれだから、妾は重い方の萬籠を貰つて來るとて、雀の宿へまゐり、巧言令色を以て重い萬籠をもらひ、エンヤラヤット、杖を力に背負て參る途中に於て、ブツツリと繩が切れ、中

からドロ／＼と出ましたのが」。

「な、な、なんじや」。

「ハツ、化物でございます」。

「フーム、しかし化物にいたせ、無料もらふなら損はないな」。

「エツ、何故で御座りますな」。

「わからんか、見世物にいたす」。

### (其二) 猿 蟹 合 戦

「三太夫」。

「ハツ、なにか面白いお噺で御座りますか」。

「フ、さうじや」。

「志からは猿蟹合戦といふを申上ませう」。

「フム、合戦とは勇ましいな」。

「ハツ、やはり是もむかし／＼ある處に」。

「老父と老婆がござりましてか」。

「イ、ヤ、猿と蟹とが御座りました」。

「フム、變ツて居るな」。

「ある日のこと、兩人と申すも如何はしう存じますが、兩人同伴まして、彼方此方と散歩に出掛ますと、兩人共拾ひ物をいたしました」。

殿は御褥を迂り出で、

「な、な、なにを拾ツた」。

「ハツ、猿は柿の核、蟹は握り飯で」。

「なんぢや、つまらぬ物ぢや、シテ如何いたしました」。

「ハツ、處で猿の申しますには、ナント蟹氏、貴公の握り飯と拙者の柿の核と交換てはくれまいかと頼みますと、蟹はそれを異議なく承諾いたしました」。

「ハテサテ、無勘定な奴ぢや」。

「ところが、御前さやうで御座らんので、即猿は握り飯を得るや否や、ムシヤ／＼と食ひ盡してしまひましたが、蟹に於ては其柿の核を己が庭前に埋めましたところ、やがて芽が出、枝が生じ、葉が茂り、花が咲て遂に數千の實を結びました」。

「なツ、なツ、恐れ入た、嗚呼蟹が深謀遠慮のあるところ、實に予などの及ぶ處でない」。

「ハツ、御感に預りありがたい事で」。

「フム、シテ夫から如何いたしました」。

「ハツ、さやういたしましたすると、猿がこれを羨み、蟹に對つてしきりに其丹精を賞しますと、元來蟹は謙讓の質で、イヤどうもお言葉で恐れ入る、時に二三個、尊公にもさし上りたいが、樹登りが不得手に依て、なんと尊公一ツ登て御隨意に食上り、お序に拙者にも採て

「下さらんかと申しますと、猿は仰にや及ぶべきと、さらくど、さながらましらの梢を傳ふが如く。」

「アハ、何と申す、猿ぢやものましらに相違ないワ。」

「ハッ、これは近頃畏れ入りました。」

「アハ、シテ如何いたした。」

「ハッ、左様いたしますと、猿の不人情も不笑ございますが、猿は成熟いたしたる美味の果實は縦に己が食し、溢ッ柿。」

「わる口を申すな。」

「ハッ、これは畏れ入りました。」

「アハ、詫をせんでも宜い、シテ猿がその溢柿を如何いたした。」

「ハッ、雨霰の如く、もぎッては蟹に打附け、もぎッては打つけ、蟹を半死半生の目に遣せて逃去しました。」

「ウーン、人面獸心な奴ぢやが、それがまた當世かも知れんよ。」

「ハッ、これは驚き入つた御意で。」

「アハ、氣の弱いことを申すな、シテその後は何いたした。」

「さればで御座りまする、蟹は只悄然として、身の不幸を嘆いて居りますと、そこへ信友の玉子と蜂と白がまありまして。これは蟹氏

いかいめされた。心元なき貴殿の面色。包まず仰せ聞られよ。ア、

御親切なるそのお言葉申すやうなき此身の不甲斐さ一と通りお聴下され。と夫より猿が無情の次第を涙片手に物語りますと、一同切齒

をして、猿の無道を憤り、直に復讐の計略を回らし、それとはなし

に猿を招きますとそこは畜生の悲しさに、厚顔にもヤツてまあり。

イヤ蟹氏先刻は失禮と、火鉢の側へ倚るやいなや、中からパチーン

と一發玉子が飛出して、猿の肩から手へと焼傷を負せた、キヤツと

叫んで逃ながら早速の薬と、糠味噌の中へ手を突込むと、友の敵と

大身の鎗で蜂が刺した、キヤツと再び驚いて外面へ飛で出るが最後、

「ゴロ／＼と屋根から臼が轉げ落ちて、天命思ひ知つたるかど」。

「猿は殺されてしまつたか」。

「ハ、ツ、御意で」。

「ヤレ／＼夫は惜い事をした、予ならば一命は助けてやるが」。

「ハツ、それはまた御寛大な事で御座りますが、しかしそれでは畏れながら、悪徒の御成敗が」。

「ナニつくとも」。

「ハツ、それはまた如何いたして」。

「即猿を鐵鎖につないで門前に曝し置き、其側に張札をいたす」。

「ハツ、なるほど罪條の次第を」。

「イ、ヤ、左様ではない、その張札の文言は」。

御持參の食物御斷り申候。

### (其四) かち／＼山

「ちそれながら御前」。

「なんぢや三太夫」。

「また、昔斷でも申上ませうか」。

「アハ、今日はその方から申したな、フム、シテ今度のいなんと申すのぢや」。

「ハツ、かち／＼山と申すので、前文は例の如く、むかし／＼或る處に、老父と老婆がござりましてと申すので。そのあとは、なにせ山家のことで御座りまするゆへ、狸めさま／＼の悪戯をいたしまする」。

「フーム、面白さうぢやな」。

「そこで老父は殘念に存じ、やうやくの事とその狸を生捕ました」。

「ウム、うまい事をいたしたな」。

「ハッ、それから老父は、縄を持ちまゐり四足を縛して椽先の梁へ釣して置ました」。

「なるほど」。

「スルト、老爺さまは居るかねと訪れる者がありますから、ハイ居ますよ、誰だねと出て見ると、村の里正の下男で御座いますから、これはまアどなたかと思ひましたら空助どんで御座いましたか、ただ失禮をいたしました、コレ婆どんも茶を上るよと申しますと、空助は。イヤ爺さま構はッしやるな、就てはなんだか己の處の旦那が急にお前さんに會て話したい事があるから呼で来いと言ひ付つたいと申しますから、老父は、それはまア御苦勞さまな、婆アどん聞ての通り里正様からお迎ひだから一寸行て来るよ。ハア案じないで行てお出なさい、お歸りまでには餅も搗て置し狸汁もこしらへて置ま

すよと、そこで老父は出てまゐりました」。

「なるほど」。

「それから老婆は一人で、ベレンタラコくと餅を搗きはじめましたが、なにせへ年寄の事でござりますから、直にくたびれて、實に餅を餅に搗て居ります」。

「アハ、ハ、なか／＼洒落るノ」。

「ハッ、三太夫が一生の智慧で」。

「ハア、それから如何いたした」。

「さやういたしますと、彼の鈎されて居ります狸が、その躰を見ましてからに。モシ／＼御老母、アノ御老母様と、やましげに呼かけましてな」。

「なるほど」。

「エ、だいぶち勞れのやうすにも見受申しますが、私の縄を解て下さ

りますれば代ッて搗て上ませうと甘言を以て申しましたが、初めのうちは老婆も、さやうさ兎なら餅は搗やうがお前では怪しいものなど、嘲弄して居りましたが、遂にそんなら頼まうかねど、その細目をゆるすやいな、狸は有合ふ杵を以て老婆を打殺しその衣を剝で己が身に纏ひつけ、スツカリ老婆に化け遂せました」。

「フォーム、悪い奴ぢやな、シテ如何いたした」。

「さやういたしますと、頓て老父の歸宅いたしましたして替玉の老婆とは知らず。ア、婆さんいま歸つたよ。チ、老爺さんお歸りかへ、さぞまア疲勞さしたらうシテ里正様の御用といふワ。さアその事だか實に己もう不思議でならない、アノ使ひの空助殿と半里も行たかと思ふ時分に、空助殿の妾はフート煙りのやうに消てまじつた。エ、ツ氣味のわるい老爺さん嚇しちやアいやだよ。イ、ヤ嚇詐ぢやない實の事だ、それから己も變に思つたが、何しろ此處まで來たもの

だから先方へ行つたら様子が知れやうからと、里正様へ行て聞て見ると、己の方では呼にヤツた覚えはない空助は昨夜から風邪を引て臥て居ると言れたから、ハハアシテ見ると今日生捕た狸の眷族共奴が復讐しを志やアがツたのかとも思つて見たが、婆さんお前の考へは如何だへといふと、狸婆は横手を打て。其事く、畜生なんてへものは逆怨みをするものだから必定それに相違ない、なんどまア憎い奴だらう、まかし老爺さんその腹愈に、料理て置た狸汁を澤山お食なさいと言れ。やれくそれは御苦勞な、ドリヤ御馳走にと、現在妻の肉とは知らず、其汁を賞翫いたしますと、ソコで狸め、正躰を現しまして。婆アを喰た爺や椽の下の骨を見ろと申して逃去りました」。

「フォーム、重ねく憎い奴だ、シテそれから」。

「ところへ、平常老人夫婦が可愛がツて居ります一疋の兎があそびに

まゐり此躰を見まして。お老父さん、ど、ど、どうした譯でございます、な、な、泣いて居らしッちやア分りません。と親切にたづねてくれますから、老人は涙ながらに事の次第を物語りますと、兎は一層耳を立て聞いて居りましたが、地団駄を踏で口惜がり、御老人敵はきッど取て上ます、ウ、ム、己れ古狸め、今にぞ思ひ知らせてくれん、ど其儘そこを立去りまして、直に狸の棲所へまゐり、何喰ぬ顔で。狸公く。と申しますと。狸はドレと出てまゐりましたから兎は、かう大層な権識ぢやアないか。されば和郎がいましたのまうたのまうと言ッたからさ。アハ、ハ、冗談いッちやアいけない、狸公狸公と言ッたのさ。アハ、ハ、それア大笑ひだ、時に何か儲口でもあるのかね。

「フム、畜類に到るまで儲け口を探すかな」。

「ハッ、さやうの義と相見えまする」。

「フム、なるほど夫から」。

「ハッ、處で兎の申しまするは、別段これといふ良考へもないが、これから二人で柴を刈りに行ないかと申しますと、狸もウム酒の代ぐらひにはなるだらうと同じまして、これより兩人にて山へ登り、柴を刈り集めました、狸は慾張の事でございませすから、ウントもう立ないほど脊負返しました」。

「ウム、なるほど、無料ではさもあらう」。

「スルト、その後から兎が突然、カチくど火を放ちますと、折から烈しき山風に炎々と燃上り、忽狸の金刀比羅なら洒落になります、狸の不動が出来上りました」。

「ヤッちらゐ」。

「ハッ、御意に召ましたか」。

「なにが」。

「洒落が」。

「ナアニ、兎の計畧がゑらいと申すのぢや」。

「アハ、、、左様で」。

「アハ、、、自惚たやつぢや、シテ如何いたした」。

「サア狸は背中一面の大焼傷をいたし、棲所へ戻つて、ウン／＼叫て居りますと、此方は兎がまた／＼謀計を回らし、唐辛を味噌に搗込んで」。

「フーム、美味さうなものだノ」。

「ハハハ、御意で」。

「シテ、如何いたした」。

「ハツ、どころで兎は耳をたゝみこんで頬冠りをいたしエー焼傷の妙薬／＼と外面を呼で歩行ますと、早くも狸が聞込む。モシ／＼薬屋さんこの通りの大焼傷だからどうか薬を塗てくれると頼みましたか

ら、兎は豫て期したる事で御座りまするゆへ、得たりや應となすつたから耐らん、火のやうに燥り上つて居ても起ても我慢が出来んといふので、兎は心中に笑ひながら、薬りといふものは古より、瞑眩せざれば其病癒ずとしてあるから辛抱しなさい、夫も出来んといふなら如何だ一ツ涼みに出掛ませんかと言ふと、ソレ宜らうと氣の長い話ではございますが、夫より兎は木の舟、狸は土の舟を拵らへ、海原へ漕出し、腹鼓をたゝいて喜んで居ります中に、狸の舟は土の事でござりますから、だん／＼と溶て来たから、こりやア大變／＼、薬屋さん助けてくれるといふ折から、吹来る風に手拭が取れ、ニヨキリと耳が立ましたから、狸は吃驚、わりやア兎だな。知れた事だ。トこれより重なる罪惡を責め、摺押取て彼の眉間を打ましたから、狸はクル／＼と三邊まはつて、イヨイ痛み入りやしたと妙な手附をしながら」。



「沈むでしまつたか」。

「御意で」。

「嗚呼、乾し固めて縁喜棚へ飾れば宜しい」。

(其五) 花 咲 爺

「三太夫」。

「ハッ」。

「今日ノ」。

「ア、今日ツたと言せたい」。

「なんと申す」。

「ハッ、此方の事で」。

「フム、その今日な、紙屑屋がまゐつた節ノ、つひには例の價の義に附て押問答になつたぢや」。

「ヤレ」。

「ヤレ」どはなんぢや、よく其方は華族たるべき者がなと、申すが、それ富人は州縣の本」。

「ア、モシ」。

「なんぢや、予は電話ではないワ」。

「ハッ」。

「そこでな三太夫」。

「ハッ」。

「紙屑屋の荷籠にかやうな書物があつたに因て持てまゐつたが、やはり昔噺ぢやらうか」。

「ドレ、拜見仕りませう、ハッ如何も御意で」。

「ム、この書物で見る處によると、例の如く、むかし或る處に、老父と老婆があつて、一日のこと老父が愛犬を伴て山嶽に行た、ス

ルト、ある地へくると、その犬が立止つてまきりにワン／＼と吠るによつて、其處を掘て見ると、山のやうに金銀が出たと申すが羨ましい事だ、コレ三太夫坐睡りをしては張合がぬけるワ。

「ハッ、羨しいことで」。

「なんぢやどんた時分に、スルト其隣家に居る爺がうらやましがつて、其犬を借りて、その山へまゐつたと申すが、惣張た奴ぢやノ」。

「ウフ、」。

「ウフ、どはなんぢや」。

「アモ、只今御前さへ羨ましいと仰せられたでは御座りませぬか」。

「アハ、それもさうぢや、スルト今度は金銀どころではなく、掘れば掘るほど、塵芥が出たので、惣張爺は大いに憤つて、其犬を打殺したと申すな」。

「御意で」。

「やがてその由を飼主の老父が聞て、大いに嘆き、其犬を埋めた處へ、紀念のため松の木を植たと申すな」。

「御意で」。

「ところが、不思議なことには、さほど年を経ぬに、その松がたちまち大木になつたに因て、臼に伐つたと申すな」。

「御意で」。

「そこで、其臼で餅を搗たところが、餅と一所に又もや金銀が湧出たと申すな」。

「御意で」。

「スルト、また隣家の老父が之を羨んで、妻の老婆と其臼を借りて来てからに餅を搗くと、やはり塵芥が出たに因り、ヤツキとなつて、その臼を敲き毀して燃てしまつたと申すな」。

「御意で」。

「御意で〜と、其方今日は樂な役だノ。」  
「御意で。」

「アハ、やはり御意でか。」

「アハ、御意で。向ふのおばさんチヨト御意で。」

「それは何のことぢや。」

「ハッ、畏れ入ります。」

「どころで、三太夫。」

「ハッ。」

「書物がそこまであつて、あとは破れて居るのぢやが、其方、あつて話をしてくれエ。」

「チャ〜。」

「チャ〜とは何ぢや。」

「ハッ〜、スルト其曰主の老父がせめて其灰でもと旅に入れて持てま

ありますと、一夜の夢にその灰をお蒔きなさると、枯木にも花が咲きますと、前の犬が告ましたに因り、慰み半分、花咲爺〜と、外面を呼び歩きますと直にある大名の耳に入り、早速御用を仰せつけられましたゆへ、畏り候と、御庭前の枯木に登り、掛聲諸共その灰を蒔きますと忽爛熳と櫻花が開きました。

「フーム、不思議〜、夫から如何いたしました。」

「さア、殿はじめ一同は手を打て、その妙を賞されました、そこで名にしおふ譬にもお大名のやうだと言た昔時の事で、銅錢を御覽じて小さな鍔ぢやと仰有り、米の皮はなぜ俵といふかと御不審おそばした、夫は〜もう〜大量な、寛裕とした、それでこそ四民の上にお立ちそばす御方と、自どありがたみの。」

「ア、もう宜い。」

35  
「で、入らせられる事でございますから、夫はもふ惜氣もなく、ハッ

「ハツと、金銀は申すに及ばず、綾や錦を澤山に賜りました」。

「ば、ば、白痴な、花を咲せたくらひで其様に取らせたのか」。

「ハツ御意で、そこがそれ、お大名のお大名たる處で、銅錢を御覽じて小さな鏝ぢやと仰有り、米の皮は」。

「ア、分ッて居る、それから如何いたした」。

「さアそれを見た例の慾張爺が、なんの造作もない事だ、己も一番ど、かの灰を簾に入れまして、花咲爺、花咲爺と呼であるきますと前大名の耳に入り、ム、また爺がまるッたと呼込で見ると人は違ッて居るが、花咲爺といふからにはと、前のやうに御用を仰せつけられましたに依り、畏り候と、いくら灰を蒔ても、花は咲ず、却て殿の目鼻や口へ飛込むた事だから、ムラ／＼と疳癩を募らせたまひ、悪ッくき爺めと御佩刀へ手が掛るやいなや、サクリと肩先を切れたから、アツと言って外面へ逃出す。話しかはッて留守居をして居る似

者夫婦の慾張婆が、まだ御褒美をもらッて来ないがと、待兼を外へ出て見ると、遙ふの方から血だらけになッて歸ッて来る爺を見て、老眼のかなしきには。まア爺さまは結構な赤い衣服を頂戴して来たと喜むたは、大笑な話しでござりまする」。

「ウム、しかし、其切られたのが、夢ならば大層宜いのちやがナ」。

「ハツ、それい何故でござりまする」。

「ウム、金か身にはいると申す」。

藪坂慾の守終

ル 滑稽類纂 出版に附 新作募集廣告

本篇掲載の材料は所謂大時代に偏するの憾みなき能はず、依て續編には力めて近世の情態を穿たんとす、就ては大方の風流才子よ、卓抜奇警の妙案あらば續々投稿あらん事を謹で囑望す。

古今名句鑑 出版に附 投吟募集廣告

無類の珍籍滑稽類纂に次ぐに古今名句鑑なる俳壇の寶典を出版せむとす、就ては四方の雅客が▲自家の俳諧として珍重せらるゝ吟、或は▲いづれにても高點を得らるゝの玉詠を●春夏秋冬亂題にて一名八句限り「はがき」に認め、●雅號及住所姓名を明記して四月三十日限り投ぜられなば、千載不朽の美冊上に芳吟は傳へらるべし。

東京市日本橋區榎正町壹番地

文祿堂編輯部

182  
102

版權  
所有

明治三十三年四月三日發行

編輯者兼  
發行者

日本橋區樽正町壹番地  
堀野與七

印刷者

京橋區西紺屋町廿六七番地  
玉村秀橘

發行所

日本橋區樽正町壹番地  
文祿堂堀野書店

印刷所

京橋區西紺屋町廿六七番地  
株式會社 秀英舍

